今月の
ブックトーク

8月（葉月）「終戦の日」

前田 由紀
／渋谷教育学園渋谷中学高等学校司書教諭

8月15日は、終戦の日。戦没者（戦死者と民間犠牲者の総計約310万人）を追悼し平和を祈念する日です。今年は、戦後80年の節目の年となりますが、現在でも世界中で戦争や紛争が絶えないことに心が痛みます。そこで、今回は、戦争と平和についていろいろな視点でじっくり考えてみましょう。

たにかわしゅんたろう・ぶん
Noritake・え
ブロンズ新社

初めに、昨年亡くなった詩人谷川俊太郎さんの絵本『**へいわとせんそう**』を紹介します。この絵本では、平和と戦争の対照的な場面が続きますが、最後には、敵と味方で変わらない場面が 3 場面連続して描かれています。この「変わらない」ことで、平和を切望する筆者の深い思いがひしひしと伝わってきます。

次は、『**ある晴れた夏の朝**』です。この題名は広島の原爆投下の朝を指しています。昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しましたが、これは、アメリカの高校生8名が日本での原爆投下の是非を肯定側と否定側に分かれて夏休みの3か月間を調査に費やして、討論する小説です。原爆は戦争を終わらせるために必要だったとする肯定側と人類に壊滅的な影響を及ぼす原爆の非道さを訴える否定側と論戦が白熱します。両方の意見が錯綜し、いろいろな見方があることが伺えます。この本は、英語版On A Bright Summer Morningも出版されています。外国の同世代の人たちと話すきっかけになるでしょう。

小手鞠るい・著
偕成社

では、日本はなぜ戦争を始めてしまったのか。日清戦争から振り返ることができるのが、『**それでも、日本人は「戦争」を選んだ**』です。著者は、中高生を対象に講義形式の序論で戦争の定義をジャン=ジャック・ルソーの言葉を引用して「敵対する国家の、憲法に対する攻撃」と語ります。それから日清戦争から太平洋戦争へと時系列に多岐にわたる資料をもとに辿っていきます。講義では、その都度著者が問いを投げ掛けて、それに答える生徒たちの発言も興味深いところです。日清戦争から線として太平洋戦争につながっていきますが、いろいろな要因が重なって戦争へと進んでいく過程がわかります。

加藤陽子・著
新潮社（新潮文庫）

最後は、『**夜と霧 新版**』。第二次世界大戦中、ナチスの強制収容所で生き残った被収容者の貴重な体験記です。著者は著名な心理学者であり、客観的に当時の状況について内側から述べています。極限状態で人はどういう心理状態に陥るのか、最初のショック状態から、すぐに感情の消滅段階に移ります。祈り、夢、自然の美しさ、歌や詩、音楽、ユーモアが慰めとなります。全てを奪われた被収容者ですが、内なる世界だけは誰にも奪えないということなのです。未来を信じる意志をもち、生きる意味を問うことの大切さ。戦争を通して普遍的な人間の尊厳を考えさせられます。

ヴィクトール・E・フランクル・著
池田香代子・訳
みすず書房

※「今月のブックトーク」「図書館のこよみ」は、全国学校図書館協議会Webサイトに掲載しています。QRコードより、PDFもご活用ください。